2025年1月25日発行

地域と協同の研究センターＮＥＷＳ

245号

第21回東海交流フォーラム（2/22）に向けて
～尾張地域懇談会の話し合いの紹介～

近藤充代（大学非常勤講師、地域と協同の研究センター 理事）

東海交流フォーラム午後の分散会の尾張地域懇談会のテーマは「買い物からうまれた『班』とつながり、その過去・現在・未来」です。懇談会ではほぼ毎月一回懇談の場を設けていますが、以下では東海交流フォーラムに向けてのこの間の意見交換の様子をご紹介したいと思います。意見交換の様子から当日の分散会がどんな話し合いになるのか興味を持っていただき、少しでも多くの方にご参加いただければ幸いです。

懇談では、地域懇談会でやっていることを生協組織に生かしていくには？さらに地域の活性化につなげていくには？どんなことを取り上げたらよいかという観点から、これからの活動の方向性について、懇談会に出席した会員の問題意識、関心事や日頃考えていることなどを自由に出し合うところから話し合いを進めてきました。

生協の原点に立ち返ってみる

話し合いのなかから、まず生協の原点に立ち返ってみることの重要性が共通の認識となり、10月29日に公開企画という形で学び合う機会を設けました。田辺準也さんからは、めいきん生協の40年をふりかえり、買い物の協同の原点について（めいきん生協40年・私的回顧録「買い物の協同　人と人とのつながり・絆」）、津坂賢一さんからは奨励研究「2030 年の生活上の変化と生協の周辺事業の可能性 －友愛・協同の視点から－」の中間報告として、2030 年以降を考察する上で、なぜ生協の創業期に着目したのかを中心に報告していただき議論しました。生協の原点を思い返すきっかけとなり、東海交流フォーラムのテーマ「『協同』の一歩をふみだそう」にもつながる内容になったのではないかと思います。

労働者協同組合に注目

また、話し合いを進めていくなかで、労働者協同組合の活動、交流が活発に行われていることや、ワーカーズ・コレクティブが1995年に出した「価値と原則」を2025年に向けて見直しに着手していること、犬山などでコミュニティ通訳をしている日系ブラジル人の皆さんによる労働者協同組合づくりに向けての動きなどが紹介され、さらに愛知県内でも新しい

【２ページにつづく】

地域と協同の研究センター　1月の活動

10 日（金）あいち在宅懇世話人会・新春情報交換会
11 日（土）菱野団地自治会多文化共生ミーティング
14 日（火）尾張地域懇談会世話人会
15 日（水）三河地域懇談会世話人会
16 日（木）くらしと平和・憲法を守る実行委員会
18 日（土）友愛協同セミナー
20 日（月）三重大学「協同組合論」講師派遣
21 日（火）社会的養護が必要な若者支援学習会
23 日（木）第 7 回協同の未来塾
24 日（金）JCA 都道府県役員会議
25 日（土）アジアボランティアネットワーク東海世話人会
第 6 回生協職員マイスターコース
26 日（日）サードセクター研究会（経済学・経営学部会）
27 日（月）地域における子どもの学びの支援共同研究会
29 日（水）常任理事会
30 日（木）第 3 回組合員理事ゼミナール
31 日（金）愛知県主催「災害ケースマネジメント研修会」

目次

第21回東海交流フォーラム(2/22)に向けて ～尾張地域懇談会の話し合いの紹介～ 近藤充代	1	
多文化・多様な共生社会のひろがりに学ぶ 妹尾成幸	3	
「コープ安城よこやまへ寄らまいかん」を開催して	4	
難民背景があるご家族の生活サポートの経験から	5	
情報クリップ	6	
書籍紹介「アグロエコロジーへの転換と自治体」	8	

【１ページからつづく】
労働者協同組合が設立され（ワーカーズ・コレクティブ愛知、阿久比、新城市）、地域活動に必要なツールとして広がっていることも紹介されました。コミュニティ通訳の皆さんの労働者協同組合立ち上げの話では、自分たちのことは自分たちで決めたい、つながりたいという思いが出発点であり、自分たちのやっていることを（ボランティアではなく）事業にしたい、共通の願いをどう実現するか？共通の課題をどう解決するか？について、他人任せではなく一人一人が自分の問題として取り組もうとしていることに協同組合の原点を見る思いがしました。

さまざまな協同のあり様や可能性が・・・

他方で、懇談会参加者各人の関心事などを出し合うことで、いろいろな協同のあり様や、新たな協同の可能性が見えてきました。例えば、地域の耕作放棄地を活用して有機農産物を育て学校給食で使ってもらうことはできないか、学校給食で有機野菜を使う試みは実現している自治体もある云々、という意見交換をした後日、発言されたご本人が一歩をふみ出そうと、地元の元市会議員に問い合わせたところ、当市の学校給食は自校方式で民間委託であるため導入が可能であり、実現可能性があることがわかったという報告がなされました。

また、他の会員からは、生協の班は減少傾向にあるが、「やってみませんか」と広げるにはどうしたらいいか？原点をあきらめたくない、との熱い思いや、同じマンションで個配を利用している（若い）人たちも孤独を感じるときがあるのでは？利用して良かった商品の情報を伝えあうなどつながりたいと思う時もあるのでは？　といった思いも語られました。先進的な事例として、生活クラブ生協愛知では、生協という枠組みを超えた地域に開かれた拠点づくり、コミュニティカフェなど多世代、多様な人々が集まれる「居場所」づくりが尾張旭、岡崎で進められていることが紹介されました。

さらに、40数年班活動をしている会員は、実は班はコスパが良いということや、さらに班から生まれたつながりをベースに地域の課題（中部電力の変電所設置への反対運動から中電による地域の電磁波測定・報告会を実現）に取り組むことができたという事例が紹介されました。

他にも、やはり班から生まれたつながりを出発点に、視覚障がいのある組合員向けに生協の商品案内の記事をパソコンに打ち込むボランティアをしているという会員もおられました。初めは一人の視覚障がいの組合員をサポートすることから広がって２０年以上続いており、現在は約30名のグループで、若い人（学生）も参加している。しかし、ボランティアをしているメンバーの願いは、視覚障がいのある人には商品の詳細がわからないという問題が組合員みんなの共通認識となり、生協が事業として取り組んでほしい、そしてこのボランティアが必要なくなることだというお話でした。この活動と問題提起は、今後ますます増えていく高齢の組合員のかかえる困難をどうするかという問題とも共通するものがあり、班や組合員同士のつながりを出発点に協同の力でできることと、それとともに（あるいはそこから発展して）生協の事業としてできること、やるべきことを考えていくヒントになりそうです。

東海交流フォーラムの分散会では・・・

分散会の前半では、後半で参加者が意見交換し、考え合う糸口として、班とつながりの原点と現在、さらに未来に向けて現在進行形の取組みを紹介していただきます。まず、「ワーカーズ・コレクティブあいち」の立ち上げの経緯とその後の変化、さらに地域や社会の課題を解決したいと願う市民や生協組合員の思いを後押しし始めた労働者協同組合の動向についてお話いただきます。次いで、先に述べた、まさにこれから仲間と一緒に労働者協同組合を立ち上げようとしているコミュニティ通訳の皆さんの現状や、生活クラブ生協愛知の地域に開かれた拠点づくり、新しいつながりづくりの取組みについて紹介していただきます。

さらに後半では、班や身の回りのつながりから生まれた活動や「協同」について、参加者が経験したり、見聞きした過去の事例、現在進行形の事例、新たに動き出そうとしている事例などを紹介しあい共有できればと思います。前述の懇談会メンバーの皆さんにも発言をお願いしています。そして、今後自分たちは生協内で、地域で、どんなつながりを作っていきたいか？そのために何ができそうか？　一歩をふみ出すには？　について意見交換ができればと思います。皆さん、ぜひご参加ください。

（こんどう　みちよ）

多文化・多様な共生社会のひろがりに学ぶ

妹尾成幸（三重のつどい　世話人）

三重のつどい（地域懇談会）が“多文化共生”に関わり始めたのは 2019 年、一昨年からは“多様な共生”もテーマに取り入れています。

三重県は南北に長い地形や交通の便とも相まって、北勢、中南勢、伊賀などそれぞれに特徴があり、地域の課題や人の集まり・つながり方も様々です。その模様を直近では、松阪市飯南町の「仲組ふれあいサロン」と、四日市笹川の「一般社団法人　みんにこ」の多文化・多世代が集まる子ども食堂に学び、昨年の東海交流フォーラムでも発信をしてきました。

中山間地の高齢者世帯を中心に活動される「仲組ふれあいサロン」からは、「地域の子ども会がなくなり、サロンは仲組がかろうじて残っている。町内で集まりがあることで、これからの生き方などが話し合える」、「電気・ガス・水道の検針がなくなって昼間に地域を見守る人が少なくなった」、「今年は地域の話題が一気に防災になっている」などの実情と、「男性の参加が少なく、なんとかしたい」という声がありました。

そこで、多様な参加と活動のあり方を見聞きさせていただくことを目的に、岐阜県の八木山地区社会福祉協議会「八木山ささえあいの家」を訪問したのが 2024 年 11 月です。玄関を開けた瞬間から、目が部屋の奥へ奥へと引き込まれました。20 人ほどのメンバーの半数以上が男性で、誰もがご自身なりのいでたちで気負うことなく、来訪者を迎え入れてくださいました。

ささえあいの家に男性が係わった最初のきっかけは、民家を活動拠点とするために、住民の男性がボランティアで集まってリノベーションしたことでした。

口々に「自分が楽しく、人にも喜ばれる得意技を出し合って、住み続けられるまちにしたい」、「一人暮らし高齢男性の家事援助を続けるうちに、家事力が格段にアップされてビックリ！」、「ありがとう！の言葉が嬉しい」、「できないことはたすけあう」などの発言があり、活動の一つひとつに大いに共感させていただきました。目的は「活動を通してつながること」。つながれば安心して、終の棲家として今の家で暮らせる、そのことを次世代にも渡していく取り組みが八木山にありました。

外国をルーツとする住民 1,600 人が暮らす、四日市市笹川地区で活動する「みんにこ」は、特別支援学校の西村先生が、その取り組みをリードされています。高校生などの若い世代から近隣にお住まいの高齢者まで、多様で多くの方々を巻き込んで、食とくらしを大事にし、「一緒にいることの楽しさ」を実感できる空間づくりをすすめられています。その活動は多岐に渡り、子ども食堂の運営やフードパントリー、地域の祭りに出店した売り上げでのスポーツイベント・学校清掃イベントなどを開催され、地域の事業者にも積極的に参加を呼びかけられています。コープみえとの係わりでは、昨年開催した「わくわくキッズフェスタ」に出展してくださり、「他の活動団体との交流がすすんでよかった」声をいただきました。

そのような地域での活動を繰り返す中で、いろいろな方々との連携がひろがり、現在は「鈴鹿高専バトンプロジェクト」のみなさんとつながっている、とのことでした。このプロジェクトは、「食品ロスの削減、食に困る人をゼロに、持続可能な活動」を目指して、学生自らが立ち上げて運営されています。

今回の東海交流フォーラムのテーマは、「協同の一歩を踏み出そう　～協同が生まれるまちづくり」です。三重の分散会では、協同を生み続けられている、「みんにこ」西村先生と鈴鹿高専の学生さんが来場される予定で、活動報告とともに、私たちとの懇談を楽しみにしておられます。

2 月 22 日のフォーラムでは、ぜひ、三重の分散会場にもお立ち寄りください。

（せのお　しげゆき）

三河地域懇談会　「コープ安城よこやまへ寄らまいかん」を開催して

報告：伊藤小友美（事務局）

2024 年 12 月 1 日（日）に、三河地域懇談会主催「コープあいち安城よこやまへ寄らまいかん」をコープ安城よこやまで開催しました。参加者は 20 名でした。概要をお伝えします。

地域で粋な老い支度をテーマに、安城よこやまに松岡さんをお招きして「寄らまいかん」を開催

三河地域懇談会は、2014 年度から「地域で粋な老い支度を」をテーマに活動を続けて 11 年目を迎えています。昨年 9 月には、お話をうかがう松岡万里子さん（元みかわ市民生協理事）が代表を務めておられる安城市の NPO「ing」（1993 年設立）の見学を行い、「座りヨガ」の講座にも参加して、多様な活動をされていることを学びました。「ing」では、高齢者の見守り、認知症カフェ、子育て支援、食・健康・趣味の講座など様々な取り組みをされています。生涯学ぶことを大切に考え、老若男女問わずさまざまな居場所を構築されていることに参加者一同感動しました。そこで、2025 年 3 月に閉店を迎えるコープあいちの安城よこやまの組合員ホール（くすの木ハウス）で、三河地域懇談会初の西三河での「寄らまいかん」を開催し、みんなで居場所について考え合う機会を設けることとしました。松岡さんには、２月の東海交流フォーラムでもお話をしていただく予定です。「ing」は 2015～2017 年度、コープあいち福祉基金の制度を活用して事業活動をすすめました。

松岡万里子さん

生協に参加して人としての生涯学習が始まったという松岡万里子さんのお話

生協との出会い　子育て中のママが子どもを連れて学習できる場所は、生協以外にはほぼなかったと思います。子育ての環境はやさしくはなかったですね。当時、生協だけが子どもを連れて学習できるチャンスを与えてくれました。子どもが生まれて、食に関心を持ったころでした。共同購入で生協に触れ、その中で、ちょうどこの「コープ安城よこやま」の店ができることに遭遇しました。どういうパンを並べるといろいろな人が使えるのか考えたり、メニューを一緒に考えるような場があったり、たまには試食もあったり、コーヒー豆・調味料の試飲があったりしました。子育てのスタートと同時に、親として、人としての生涯学習が始まったのがこの「コープ安城よこやま」のくすの木ハウスでした。生協との出会いでした。

セカンドハウス　テーマを持った場所、大事な人を亡くした人の集まりだとか、一人でご飯を食べるのが寂しいからみんなで食べたい人、認知症ではないけれども一人ぼっちで過ごしていてまだ元気だけれども居場所を探している高齢の方々とか、そういう人たちが、私たち「ing」の「セカンドハウス」に集まっています。みなさんの実家という感じです。

DV への支援　DV への支援もしています。カウンセリングをするわけではなく、受け止めたあと、情報提供をしています。たとえば、こういう場にいくとこういう相談ができる、避難するにはこういう経路がある、被害があれば証拠写真を撮ってくださいね、という情報提供です。自分の状況を、「これは DV だ」と知ることによって一歩すすむことができます。その手伝いという形の相談です。ホームページに、DV 情報提供、いじめ、不登校相談ということを載せています。タイミングが難しいので、メールや電話という形が最近多いです。

まちづくりへの思い　気づいた人が自ら発信するということが、時代がどう変わっても必要なことだと思います。共感を得て、時代がいい方向へ動く、「ing」という名前はそういう意味で、川の流れです。どんどん流していく、そういうものであってほしいと思います。生協が時代の流れで、コープ安城よこやま店を閉めるのは非常に残念だけれども、ただ残念だけではなく、そこから何を生み出すかがとても大事なことだと思います。子育ての時に応援してもらい、人として扱ってもらった、その場を次にどうされるのか、個人的には関心があります。理想を持ち、共感を得ることに努力することが大事だと思います。

お弁当を食べながら笑顔いっぱいで懇談！お弁当を食べながら、参加者全員が一言ずつ話しました。居場所についてだけでなく、地域での支え合いについてもたくさん話題が出されました。安城よこやまのお店についても、いろいろな思いが出され、考え合う場となりました。最高齢の高橋正さんからは「92 歳でも夢を持つことが大事」とのお話がありました。

三河地域懇談会世話人会では、この「安城よこやまへ寄らまいかん」の経験を東海交流フォーラムにつなげていこうと話し合いをすすめています。　　（いとう　こゆみ）

YouTube コープ安城よこやまへ寄らまいかんフルバージョン
https://youtu.be/4A_Nyj-CPRo

特定非営利活動法人
ing のホームページ
https://npoing2021.wixsite.com/npoing

YouTube
コープ安城よこやまへ寄らまいかん
https://youtu.be/mV2uL6j88v8

難民背景があるご家族の生活サポートの経験から

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）　高桑樹理（地域と協同の研究センター会員）

1. 難民背景のあるご家族への支援の現在　神田すみれ

出入国管理庁によると、ウクライナ避難民入国者数は 2024 年 12 月 31 日現在 2,736 人、在留者数は 1,974 人で、在留者は微減しています。男女別では男性が 799 人と微増、女性が 1,937 人です。東海地域では、愛知県は 118 人と継続して増加、岐阜県は 10 人と減少、三重県は 1 人で変化はありません。

日本財団は生活費として 100 万円/年を最長 3 年間支給、身元引受先がない避難民を対象には、法務省が生活費支援を最長 2 年支給してきました。戦争が始まって 3 年が経過し、生活費の支援が終了する中で、避難民の約 2 割が帰国を選択しています。一方で日本に残ることを決意する人、帰国と定住との間で揺らいでいる人もいます。私も避難民の方たちから就労や大学進学、生活保護の申請の相談をいただいています。日本での避難生活が継続する中で出てくる課題は、これまで日本社会が経験してきた定着・定住支援と重なります。ウクライナ避難民の独立した支援ではなく、これまでの社会の経験をしっかり活かすことができるようにするべきだと考えます。今回、研究センター会員の高桑樹理さんが、難民背景があるＲさんのご家族の生活サポートの経験を書いてくださいました。日本に来て間もない方々にとって、同じ地域に暮らす人たちの支えは生活基盤を築く大きな助けとなります。こうした動きがさらに広がり、多様性を受け入れる地域が増えることを願っています。　（かんだ　すみれ）

2．ご家族への生活サポートの経験から　高桑樹理

Ｒさんは正規職員として働かれています。Ｒさんのお子さん上の子 3 人と一緒に、3 学期が始まる前に学用品の購入のため、近くのお店へ行かせていただきました。学校での共通言語がないということで、私にできることはあるのかと最初は不安に思いましたが、お子さんたちも英語が分かるということで安心しました。ご自宅へ伺い、私が建物を間違えて約束の時間に少し遅れてしまいましたが、無事にお会いすることができました。そのまま、子どもたちと一緒にドニチエコ切符を使って、バスと電車でお店へ向かいました。行きのバスでは、少し不安そうな表情もありましたが、バスで橋を渡った際に大きな川が見え、ちょうど太陽の光が照らしてくれ、明るい表情を見ることができ、内心ほっと安心しました。Ｙさんから頂いたご寄附から、できるだけ多くの学用品がそろうよう事前に頂いていたリストをもとに、まずは 100 円ショップで、えんぴつ、筆箱やノートなどを、好きな色やデザインを子どもたちに選んでもらいました。上靴と運動靴は、自分たちで試しに履いて、それぞれに合うサイズを探していただきました。

お買い物に集中していたため、すっかりお昼の時間を過ぎてしまいました。Ｒさんが伝統的な料理をご用意してくださっていると連絡があり、子どもたちとバスと電車で無事にお家へ帰ることができました。お父さんであるＲさんから伝統的な料理の説明と食べ方を教えていただき、スパイスをたくさん使用することや豚肉とアルコールは宗教上の理由から飲食できないことなども教えていただきました。小学校 6 年生のお姉ちゃんは、伝統的な衣装の刺繍に取り組んでいると、実際にどのように刺繍しているのかを見せていただきました。

お子さんたちは、11 月中旬に来日したばかりですが、ひらがなと数字を勉強していると聞きました。また、下のお子さん 2 人も「1～10 を言えるよ」と教えてくれました。下のお子さん 2 人は、初対面だったこともあり恥ずかしがってドアにかくれて顔を出して様子を見ていましたが、お姉ちゃんお兄ちゃんの購入したものを見て、お部屋に入ってきて、色鉛筆や赤白帽子に興味津々で、帽子をかぶり合っていました。子どもたちの様子から、家族の温かさを感じることもできました。5 人のお子さんのお父さんであるＲさんとは、お会いするのが 3 回目ということもあり、伝統的な料理や文化についてたくさん教えていただくことができ、貴重な機会となりました。引き続き、生活面や子どもたちの学習面でのサポートや日本での社会とのつながりを築く機会を作っていけたらと考えています。ご寄付をくださったＹさんをはじめ、神田すみれさん、後日暖房器具を譲ってくださった方に感謝申し上げます。　（たかくわ　じゅり）

情報クリップ

co･opnavi　2025.1　No.872
増床で品揃えを充実し多様化するくらしに対応する生協の店舗
日本生活協同組合連合会　2025 年 1 月　Ａ４判　32 頁　363 円（消費税込）

＜私たちの「この一枚」＞　コープおきなわ
　障がいがある方もない方も、共に働く元気な職場づくり
総合推進室　室長　比嘉吉昌
新春対談
　村木厚子　（福）全国社会福祉協議会　会長
　土屋敏夫　日本生協連　代表理事会長
特集
　増床で品揃えを充実し
　　多様化するくらしに対応する生協の店舗
＜今日も笑顔のコープさん＞　コープ自然派おおさか
＜想いをかたちに　コープ商品＞
　ＣＯ・ＯＰ骨取りさばシリーズ
＜生協大好きママコプ山さんの　教えて！ＣＯ・ＯＰ商品＞
　ＣＯ・ＯＰミックスチーズ
＜地域・社会づくり REPORT＞　高知県生協連
＜日本全国　宅配現場におじゃまします＞　ユーコープ
＜松丸　奨先生の食育エッセイ＞　進め栄養！
＜明日のくらしささえあうＣＯ・ＯＰ共済＞
大阪いずみ市民生協
＜ほっと navi＞　日本生協連　／　コープしが

生活協同組合研究　2025.1　VOL.588
気候危機に対応するために
公益財団法人　生協総合研究所　2025 年 1 月　B5 判　80 頁　定価 550 円（消費税込）

巻頭言
国際協同組合保険連合総会に出席して　和田寿昭
特集　気候危機に対応するために
日本の気候エネルギー政策の動向と
　転換を求める市民の取り組み　豊田陽介
気候危機と社会運動　長谷川公一
激化する気候変動影響への対策
ー適応策の方向性と課題ー　田中　充
地球温暖化がもたらすもの　鬼頭昭雄
進行する気候危機と政策の緊急性　松下和夫
コラム１　気候変動に挑戦する地方自治体
　ー世界気候エネルギー首長誓約　杉山範子
コラム２　福井県民生協の気候変動対策　高井健史
コラム３　気候変動問題と歩んで四半世紀超
　～カーボンマイナスの街づくりに向けて～　山崎求博
■国際協同組合運動史　（第 34 回）
　1954 年第 19 回パリ ICA 大会②　鈴木　岳
■本誌特集を読んで（2024・11）　岩井祐一・有田芳子
●公開研究会
　「消費者とはどのような存在か
　　～その歴史的位置を考える～」　（2／5）
●生協総研賞第 15 回表彰事業候補作品推薦のお願い
●生協総研賞第 15 回表彰事業実施要領　（抄）

文化連情報　2025.1　No.562
国際協同組合年 2025 を迎えて
組合員の声に応え続けること、相手を思いつながること
日本文化厚生農業協同組合連合会　2025 年 1 月　B5 判　80 頁　文化連情報編集部 03-3370-2529＊注

新年の御挨拶
国際協同組合年を迎えて食と医療福祉と平和を守る
　協同組合の運動のさらなる発展へ　八木岡　努
新年の御挨拶　役員一同
2025 年新春座談会　国際協同組合年 2025 を迎えて
　組合員の声に応え続けること、
　　相手を思いつながること
真方和夫・三瓶壮文・前田健喜・熊谷麻紀
第 6 回協同組合の地域共生フォーラムを開催
　災害と協同組合をテーマに連携よびかけ
地域医療に支えを
　山口県厚生連が直面している課題　大亀浩司
文化連役職員規範にかかるスローガンを決定
　ともにあゆみ、ともに支える

第 77 回厚生連常勤役員参事会議　講演録
　患者・スタッフに優しい AI ホスピタルの実現　長堀薫

協同精神のリレー　(22)
　農業・農村・農協―苦難の時代へ　伊藤澄一
二木教授の医療時評（227）
　診療報酬地域差の導入・撤廃の経緯を探る　二木　立
会員農協ズームイン！　JA ハリマ
　地元の子どもたちへ JA の安心安全な特別栽培米を
食べ物から考える〈共・コモン〉の仕組み（2）
　経済学者の夕飯を作っていたのは？　平賀　緑
医工連携が拓く医療技術イノベーション（6）
　このヤギは幸せなのか、の質問が今も頭を離れません
梅津光生
全国統一献立
　静岡県の郷土料理　静岡おでん　小林優子
臨床倫理メディエーション　(78)
　意味の人間学（2）
　―ロゴセラピーへの批判と倫理的な課題　中西淑美
自著を語る
　秘境探検―西表島踏破行　安間繁樹
デンマーク＆世界の地域居住（186）
　「変革の福祉」に学ぶ「これからの福祉」　松岡洋子
□書籍紹介
　農協が日本人の“食と農”を守り続ける
　－安全・安心に賭ける人々の物語　杉原浩樹
□書籍紹介
　かかりつけ医機能と感染症有事
　－欧州に学ぶコロナ危機対応の問題点
□書籍紹介
　西はりま天文台の星空日記
　－世界最大の公開望遠鏡「なゆた」で見る
星の世界へようこそ
▸線路は続く　(192)
　復旧した鉄道　能登はやさしや・・・　／　西出健史
▸最近見た映画
　はたらく細胞　／　菅原育子

生協運営資料　2024.11　No.339
働き続けられる組織・職場であるために
～引き続く人手不足への対応策として

日本生活協同組合連合会　2024 年 11 月　B5 判　70 頁　880（消費税込・送料別）

巻頭インタビュー
●私たちの生協のこれから
これからも食と農・産直を大切にしていきたい
東都生協●理事長　風間与司治氏

特集
働き続けられる組織・職場であるために
～引き続く人手不足への対応策として
1「2024 年度　人事労務実態調査結果」
　全国集計の概要と主な特徴
　日本生協連●管理本部・全国生協・人づくり支援センター
　人づくり支援グループ　グループマネージャー河田慎吾氏
　管理本部　全国生協・人づくり支援センター
　人づくり支援グループ　石島正信氏
2「残業ゼロ化」「配送の二便化」などで
　労働環境の改善に意欲的に取り組む
　おおさかパルコープ●常務理事　甲斐信貴氏
　執行役員　事業支援部　松本仁氏
　事業支援部　総務　マネージャー　山本啓司氏
3 育児と仕事の両立支援に　育児時短専用職種を導入
　みやぎ生協・コープふくしま●執行役員　総務部部長
佐藤博幸氏
　総務部　厚生部長　兼　健康管理室長　菊地信一郎氏
連載
●これからの店舗事業のあり方を考える　第 43 回
　危機を力に変え、エリア事業本部制導入で
地域に組織全体で貢献する
　ならコープ●代表理事　常任理事　盛口篤氏
　中エリア本部　本部長　瀧澤友之氏
　店舗事業企画部　部長　吉村弘章氏
　店舗事業企画部　あったか便企画グループマネジャー
花田昌幸氏
　店舗事業企画部　あったか便企画担当　丸山明美氏
特別企画
東大の事例から考える
　「なぜ意思決定層は男性だらけなのか」
　東京大学　副学長　グローバル教育センター
　センター長　大学院総合文化研究科　教授
矢口祐人氏

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(✤)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

熊﨑　辰広 会員からの書籍紹介

アグロエコロジーへの転換と自治体

生態系と調和した持続可能性な農と食の可能性　編著：関根佳恵・関耕平

発行：自治体研究社　発行日：2024 年 10 月　価格　2750 円（消費税込）

熊﨑　辰広 会員からのご紹介

「アグロエコロジー」という言葉はまだあまり耳慣れないことばかもしれませんが、直訳すれば「農業生態学」となります。但し一学問分野にとどまらず、「農業生態系の働きを研究し説明しようとする**科学**」、「農業を生態学的に持続可能なものにしようとする一連の**実践**」、「農業を生態学的に持続可能で社会的により公正なものにすることを追及する**運動**」、つまり科学と実践と運動を含み、単なる農法だけではなく、農業の営みを生態系の物質循環の中に位置付けて、生態系を維持・発展する農と食のシステムを指します。そこから農村のくらし、公平性、福祉、食文化、責任あるガバナンス、循環型経済や連帯経済等の社会の有り方にも関わってきます。関根氏は、特にフランスの実践に注目し、国策として進められているアグロエコロジーの政策を紹介しています。また関氏は、農業・農山村の基本的な機能である食料生産機能は危機的な状況であるとし、その回復のために、長年にわたる農業・農山村の軽視・切り捨てをやめ、持続可能な農山村を維持・発展させるための政策転換が求められている、とし国土保全や生物多様性保全等他面的機能を評価し、社会全体で支えることが必要だと指摘しています。

農民連は「アグロエコロジー宣言（案）」を出し、この運動の最先端に立っています。具体的には本書第 6 章に、農民連会長である島根県の長谷川敏郎氏の実践が紹介されています。また本書第 9 章では、岐阜県白川町で展開しているアグロエコロジーの実践とそれを支える NPO 法人ゆうきハートネットの取組が取り上げられています。関氏は、移住者が地域に根ざし有機農業の取組むための支援を行ってきたハートネットの活動実践と、こうした活動を白川町役場がしっかりとサポートし、連携・協働している実践が紹介され、これらの事例は、今後の自治体政策のあるべき姿を構想・実践していく上で、大いに参考になると指摘しています。

研究センター２月活動の計画

1 日（土）アジア・ボランティア・ネットワーク東海の学習交流会
5 日（水）協同組合ネットあいち幹事会
6 日（木）JCA 全国交流会
　　第８回協同の未来塾
13 日（木）協同組合研究組織交流会（京都）
　　三河地域懇談会世話人会
14 日（金）被爆ピアノコンサート
22 日（土）第 21 回東海交流フォーラム
25 日（火）研究フォーラム地域福祉を支える市民協同
26 日（水）常任理事会

※企画は新型コロナウイルス感染拡大防止等のため中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センター
Facebook
下記 QR コードでご覧ください。
FacebookQR コード

地域と協同の研究センター
ホームページ
下記 QR コードでご覧ください。
ホームページ QR コード

地域と協同の研究センターNEWS 第 245 号　　発行日 2025 年 1 月 25 日定価 200 円（税・送料込み）
年会費には購読料が含まれています
発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事　森 政広
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通１－３９ TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail AEL03416@nifty.com　HP http://www.tiiki-kyodo.net/